

【附録】

なぜ日本では「マンガ・アニメ的なるもの」が発達したのだろうか

-日本文化論-

アニメーション映画監督

公益財団法人徳間記念アニメーション文化財団理事

高畑 勲

この講座は、とりあえずいろんな面白い絵をお見せしたい、見て驚いてもらいたい、その一心でやってきたわけで、まだまだ一杯あって今日とても見せきれないんですけども、日本文化論というのを掲げたからには、そのとぼ口にまでは至らなければならないので、今日はできるだけお話をします。それで、じつは昨日が誕生日です、80歳になりましたー（拍手）—どうも、いや、それはどうでもいいんですけど、その時にですね、メールをくれた人が数人いて、みんな「傘寿おめでとう」って書いてあるのね。サンジュって傘という字書きますね。それは八十だからですね、傘の略字が。ああいうの皆そうです。喜寿っていうのは七十七を崩し字にすると喜ぶという字に近いとか、八十八の米寿はおめでたそうとか。でも傘寿や卒寿や白寿とかはただの駄洒落でしょう？ 百から一引いて「白」が九十九なんて。ああいうの、漢字使ってるから起源は中国なんだと思いますか？

じつは、ああいう変なことをするのは、日本人なんです。要するに漢字という視覚言語で遊んでるわけ。メールの絵文字も、テレビの音声にかぶせたテロップによるギャグも、「へのへのもへじ」や「棒が一本」など、日本にしかない「絵描き歌」も、もっと昔の「葦手」も、葦手というのは筆で綺麗に葦を描いたのかな？とよく見たらそれが和歌を書いた文字だったというものですが、みんな言葉の「絵」と「意味」と「音」による戯れであり遊びです。

日本文化で何が一番ユニークかと言えば、それは言語体系だと思います。言語学的には、言語は音声だけで自立しているはずなのに、日本では早くから、いわゆる「言葉」と「文字」が絡み合って切り離せない、1対1で対応しない、すなわち音声言語と視覚言語が複雑に重層する、ということがあります。そしてそれを面白がって、言葉や文字で戯れたり遊んだりする、という文化が発達してきたんですね。何故日本でマンガ・アニメ的なものが発達したのかということを考えるうえで、これは大変大きな要素なのではないか。

日本語では同音異義を平気で許します。漢字による同音異義語には、かたよる「偏在」と、あまねくの「遍在」のように、意味がまるっきり正反対になるものが私が集めただけでも二十以上あるんです。すごく意味がとりにくいのに、同音異義を平気で許している。ということは、言葉を聞いたとき、視覚で文字を思い浮かべる能力に依存しているということです。ですから駄洒落が大好きです。広告など、駄洒落だらけですよ。

コンピューターのワープロ機能で、平仮名を入れると変換された漢字がたくさん並んで出てきますが、駄洒落が得意な人というのは、パソコンなど存在しないときから、こういう変換能力が非常に発達していた人のことなんです。瞬時にいっぱい変換できて、それを取捨選択して組み立てる能力に長けているから、せっかく思いついたのを黙ってはおれなくて人に披露してしまう。嫌われたりするけど、じつはすごい能力なのです。しかし、駄洒落はともかく、ある程度の瞬間的な変換能力は日本人である以上、あるいは日本語を使う以上、必ず持たなくてはなりません。そもそも変換機能というのが世界的に見て一般的ではありませんよね。

駄洒落が他の国の言葉に無いかと言えば、それは勿論あります。昔の詩から今のラップに至るまで、韻を踏むのは大好きです。けれどそれは主に音声同士でやるのであって、音声言語とそれを書き表す文字との間で、そういうやり取りとか戯れをこんなに熱心にやっているのは、おそらく世界で日本語

が唯一ではないでしょうか。江戸時代も盛んでした。『親敵討腹鼓』（おやのかたきうてやはらつゞみ）というお話の中の狸は、首尾良く兎（うさぎ）を真っ二つにしますが、頭と胴のそれぞれは鶉（う）と鷺（さぎ）になって飛んでいっちゃう。そして二羽は鰻をつかまえてきて、世話になった夫婦のところへ持ってくる。そのとき、「これで命をうなぎたまへ」と言うんです。「つなぎ」の駄洒落ですが、「う」と「つ」の字が似ているという視覚的要素が入っていることに注目してください。十返舎一九の辞世は、「この世をばどりゃおいとまにせんこうのけむりのなかにはいさやうなら」です。落語の「青菜」や狂言の「箕被」（みかづき）など、駄洒落や掛詞を主眼にした演目もあるし、もっと遡って平安時代、百人一首は真面目そうな恋の歌も懸詞（かけことば）だらけで、「来ぬ人をまつほの浦の夕風に焼くや藻塩の身も焦がれつつ」の「松」と「待つ」のように、少ない字数の中で情景と人情を同時に表現するためのすばらしい手段になっているのですが、じつはあれだって原理は駄洒落と同じで、同音異義なんです。しかも、和歌での言葉遊びには、音声によるのではなく、書かれてはじめて駄洒落の面白さが分かるものも多い。たとえば、「いとはれてこそ」と書いて、「厭われて」と「いと晴れて」を懸けるとか、書くとき濁点を打たないから二様に読めて洒落になるとか。日本では「歌」だからといって必ずしも音声的とはかぎらず、すでに平安の昔から、懐紙かなにかにさらさらっと書いて取り交わすという、視覚的な側面が強かったことをよく示しているのだと私は思います。

私たちの『かぐや姫の物語』の原作「竹取物語」も、各エピソードは駄洒落で落ちがつかます。しかも、鉢と恥の「はちを捨つ」、敢へと阿部の「あへなし」、食べがたいと耐えがたいの「あなたへかた」などは、発声ではなく文字を見てこそ駄洒落が分かるんです。（何十年も前、台湾ではコココーラのことを「口可口楽」と書くと聞いて大変感心したことを思い出しました。私が知らないだけで、こういう見事なものが中国語にはいっぱいあるのかもしれない。）

音声と文字での戯れの最たるものと言えば、名付けです。日本ではどう読んだらいいのか分からない名前を平気でつけます。それを許している。文字が優先登録されるだけ。こんな民族はまずありません。普通、各民族で、文字と音声はほぼ1対1で対応するんです。ところが日本では、何であれ、読みがまちまちでも、誰も不思議がらない。藤野町はフジノマチかフジノチョウか。小田部はコタバかオタバか。学校の先生は最初の出席を取る時、氏名の読みにいつも困ります。苗字であれ名前であれ、本人に聞かなきゃならない。「どう読むの」とか「こう読んでいいの?」とか。先生に間違っ読まれて、それを訂正する勇気が出ない気の毒な子もいます。今、キラキラネームが話題になっていますが、そういう名を付ける親御さんは、視覚的な字面（じづら）と意味、音声と意味の両方を、名前として子どもに贈ろう、自分も楽しもうという、大変欲張りな人たちなんです。問題になった「悪魔」という名だって、それを「てんし」と読んでもそのこと自体は許されるはずですし、愛基を「あき」、美誠を「みま」と読んだり、「さやか」なんて、万葉仮名風に「紗耶香、沙也加」あるいは「清花」などなど、ステキな字がいくらでもあります。

しかしじつは、こんなのは昔からあったことで、平安貴族の名をどう読むか、学者で意見が分かれたり、江戸のはじめに曲直世道三（まなせどうざん）という名の医者がいたり、もうむちゃくちゃ。最近の乱れというより、もともと日本語にあった問題が、より露骨になっただけのことなのです。

最初に、日本文化で何が一番ユニークかと言えば、それは、音声言語と視覚言語を重層させる言語体系をもつことだと言いました。言語学的には、言語は音声だけで自立しているはずですし、中国から文字、漢字ですね、漢字が入ってくるまでは日本でもそうだったわけです。ところが、文字のなかった大和民族が文字言語である漢字を受け入れる、その受容のあり方がじつにユニークだったのです。

漢字本来の漢文、すなわち中国語を習得するのは、英語を習って読み書きするのと同じですね。その中で、どうしても必要な固有名詞など大和言葉は、漢字の一字ずつを表音文字として使って記述する。これもローマ字と同じやり方、いわゆる万葉仮名です。次に漢語を単語として大和言葉の会話の中で使うのも「ピッチャーがボールをキャッチした」と同じやり方で、特にユニークではありません。当時の知識人がすばらしいのは、中国語を巧みに操って官僚仕事をこなし、文書は漢文で書き、先進文化に触れ、エリート意識を満足させただけでなく、その文字（漢字）を使って、自分たちの土着の文化、大和言葉そのものを、どうやって記述しようか、それを考え抜き、工夫して、それを見事に成し遂げたことです。彼らは漢字を受け入れても、大和言葉を決して捨てなかった。

万葉集は日本の長短の和歌をそのまま音として読めるように漢字で記述したのですが、表音文字の万葉仮名だけでなく、もう訓読みもしているんです。訓読みというのは、漢字の意味を大和言葉に翻訳して、その大和言葉で漢字を読む、ということです。すごい工夫で、当たり前みたいに「訓読み」なんて片付けしないで、もっと驚いてもいいことなんですよ。それだけでもすごいのに、もう駄洒落や頓智をいっぱい使っているんです。言語と戯れている。びっくりします。

「二八十一あらくに」というのは、八十一が九九で、「にくくあらくに」と読みます。「十六」と書けば「しし」です。では、「見るごとに、恋はまされど、色に山上復有山ば」はどう読むと思いますか。「山上復有山」は山の上にまた山がある、すなわち「出」で、「色に出（いで）ば」なんです。恋の歌なのにふざけてますね。こういう工夫が一番感心するのは、孤独の悲しみの「孤」と「悲」で表記した恋、「孤悲」（こひ）です。

「旅にして もの恋ほしきに 鶴（たづ）が音（ね）も 聞こえずありせば 恋て死なまし」という歌ですが、最初の「恋ほしきに」の場合は「戀」と書いて「こひ」と訓読みしたのに、「恋て死なまし」は、「孤悲て死萬思」と書いてある。日本における恋愛感情というものはしばしば「孤悲」だったんですね。I miss you. 離れていて寂しい、悲しいということが「恋ふる」ということだったので、もうぴったりです。その上、「死にたい」が「死萬思」なんて、すごすぎます。大和言葉の和歌を、漢字という視覚言語で見事にイラストしている。

日本は漢字文化圏の一員ですが、漢語を取り入れただけでなく、漢字を使って独特の言語体系を作りました。そういう試みは朝鮮半島でもあったようですが、定着しないで廃れます。ところが日本では、その後、万葉仮名的考え方を五十音の「平仮名」という形に発展させ、平行して、漢文を大和言葉の文法にしたがって読むための工夫（返り点・送り仮名による読み下し）から、「片仮名」を生み出しました。この多彩な表記法が、視覚的な言語表現の素材として現代にまで脈々と受け継がれてきたわけです。すると、どういうことが起こるか。

例えば子どもがはじめて漢字を習います。「山」という字の形に感心しながら「やま」と読むことを覚えます。1対1で対応する普通の言語ではそれで事足りるはずなのですが、ある時点で「富士山」を習う。すると、「え、これ“さん”とも読まなくちゃいけないのか」ということになる。そうこうしていると、「大山」と書いて関東地方ならば「おおやま」、中国地方だったら「だいせん」と読むことを知るんですね。そうすると「おっ、“せん”とも読むのか!」ということになります。そうすると、日本人はどういう風に脳を活用させなくてはならなくなるのか。それは、「山」という漢字は漢字で絵（映像）として覚えておいて、音声言語としての「やま」とか「さん」とか「せん」とかは、また別に覚えておくことになるのです。そして必要に応じて、両者をその都度組み合わせる。さらに別の読みがあるかもしれないから、「山」＝「やま」と一体化して覚えてしまうとまずい。これがとりもなおさず頭の中に変換機能を持つということですね。

このような言語のあり方が日本人の脳を普通の脳とは違うようにした、マンガ的にした、ということをはじめて書いたのは、解剖学者の養老孟司さんです。彼が言うには、脳が損傷して失読症に陥っても、日本人はまるっきり読めなくなるのではなくて、どちらかは読めるんだそうです。仮名は読めないけれど漢字は読めるとか、その逆だったり。要するにそれはさっき言ったように、その両者が脳の別々のところに収めてあるからです。片一方が壊れても、片一方は生き残っていると、そういうことが起こりうるのです。それは1対1で対応していたらあり得ないことです。3対5ぐらいで対応する言葉、日本語だからこそその現象です。「山」のような単純な言葉でさえも複雑怪奇なわけですから、それを子どもの時から操っていかなきゃならない日本人は、あるいは日本語使用者は、頭の使い方が当然変わるはずで、それが、「絵」に「吹き出し」で言葉がついているマンガそっくりだ、というわけです。養老さんは、高橋留美子さんの『うる星やつら』、この題名もすでに駄洒落ですが、その中から、ちびの坊主「錯乱坊」（さくらんぼう）を例に挙げます。

錯乱坊は座っておもむろに言います。「私のことをチェリーと呼んでください」。ギャグですね。さらに、錯乱坊は飛び上がって「喝!」と叫ぶんですが、その吹き出しが「揚豚!」となっていて、ご丁寧に「カーツ!」とフリガナ。養老さんが挙げた例はじつに見事で、「絵」がなくても、漢字とフリガナだけで「絵」と「吹き出し」のマンガになっている。だから話をただで笑ってもらえるわけです。

ところで漢字文化圏の日本以外の主な国はヴェトナムとコリア（韓国・北朝鮮）ですが、そのどちらも日本のようなことはしていません。役所の公文書は日本書紀などと同じように漢文だったし、自前の文字を案出して自民族の言葉を記述するのは結局ずっと後世になってからでした。ですから漢字として読むものはいわゆる「音読み」しかないわけで、文字と読みは1対1で対応しています。「アンニョンハセヨ」のアンニョンは安寧、「カムサハムニダ」のカムサは感謝ですね。

日本語の複雑怪奇さは、日本語を習得しようとする人にとって災難でもあり、同時に惹かれるところでもあるようです。日本語はヘンで面白いから。

どうして日本でだけ、このようなことが起こったのかというと、それは文化の中心地である中国か

らの距離にあったのではないのでしょうか。日本は、陸続きで中国に接していた朝鮮半島やヴェトナムとちがいで、地政学的に海を隔てた島国として絶妙な位置にあったことが独自の文化を育んだのではないか。これは、この講座の初めにお話ししたことと大いに関係があると思います。すなわち、マンガ・アニメ的な文化は、中国や西洋といった文化の“本家”から先生が来ず留学もしなかったけれど文物だけは入ってきていた時代、三度の半鎖国的な時代にピークを迎えた。それは権威から自由で、のびのびやれたからである、ということと似ています。そして奈良時代の昔から今日に至るまで、営々と育んできたこの音声言語と視覚言語が重層する独特の言語体系こそが、マンガ・アニメ的な文化伝統を生み出す基盤になったのではないか、というのが私の仮説なのです。

絵画史などでは、絵を使って物語を語る文化が発達したのは、ほとんどが宗教と密接にかかわり、文字の読めない人々に布教するためだった、と言われていています。例えば西洋の壁画やステンドグラス、インドの浮彫、中国の壁画などです。ところが、日本では、平安時代の天皇や貴族の楽しみのために、字の読めることを前提にして個人的にしか鑑賞できない絵巻物が生まれたのですし、内容も、世俗的なものが中心で、たとえ仏教がらみでも、「奇譚」ともいえるべき縁起説話を扱っていたのです。そして一方では、この絵巻という形式が便利だからという理由で、鎌倉時代以後、仏教説話や祖師伝も増えてきますが、もう一方では、識字率の高まりとともに、御伽草子系のマンガ・アニメ的なものも次第に盛んになっていくのです。さらに江戸時代に入ると、浮世絵や絵入りの刊本絵本が隆盛をきわめます。絵と文字による情報の宝庫です。世界的にみて、江戸時代は識字率の高かったことが知られています。

ともかく、日本では文字か絵か、ではなくて、文字も絵も、ですし、音声としての言葉か、絵としての文字か、ではなくて、言葉も文字も、なんです。スマホなんかもそうでしょう。テレビを見てても、人がしゃべっているのに文字もやたら出る。たとえば沖縄のおばあさんの声が聞きとりにくいから下にテロップを出すというのならいいですよ。だけどそうじゃなくて、「心がポキンと」と言ったとたん「ココロがポキン！」なんてのが画面に出る。しかもその字自体がポキンと折れて、コテンと下に落ちたり。漫画ですね。その逆もあります。無声映画というのは、音声がなくても成り立つように作ってあって、必要に応じて字幕が出ます。チャップリンのを見ていればわかりますよね。ところが日本ではそれに活弁というのを付けた。画面を見ながら弁士が状況説明から台詞までやってしまう。絵も言葉も、なんです。

識字率のことを考えた時に思い出したことがあります。私は、何十年も前、一ヶ月近くソ連にいたことがあります。そしてその間に、キリル文字というロシア語の文字が読めるようになりました。意味はわからないけれど。どうやって読むのか。それは簡単なんです。アルファベットと共通する字もあるし、街を歩いていて、手がかりになる表示や看板もあったから。ところが後にですね、アジア・アフリカ文化センターというところで、AA地域の識字率向上のためにアニメーションを作らないかという話があった。まず疑問に思ったのは、アルファベットの表音文字なのに、「どうして識字率が高まらないのだろう？」と。図々しい話をしてはいますが、日本はもともとずっと複雑な言語体系を持っ

ているのに世界的にみて江戸時代から識字率が高かった。もちろん教育の機会の問題があつて、日本でも貧しいがゆえに字が読めなくてつらい暮らしをした人もいます。でもなぜだろう、覚えるべき文字数が限られているのに、と思った。そしてその時思いついたことは何かというと、そういう地域ではみんなしゃべることが好きだということです。会話することが大好きな人たちは会話で全部用が足りると思っている。努力して文字を覚えようという意欲が湧きにくいのではないか。対人関係が大好きでしようがないところは自動販売機なんて絶対に置かないです。しゃべって買ったほうが面白いですから。店に行って視覚的に陳列されていなくても、店の人と話をすると奥から出してくるとか、そういうこともあります。イタリアの町などもそうですね。そういうのと日本人は全然違います。できれば対人関係を避けたい人だらけです。そのうえ、様々に文字と戯れる文化があるし、街も文字看板であふれている。子どもが学校で習うより前に文字に興味をもつてもちっとも不思議ではない土地柄なんですね。識字率の問題はそういうこととも関係があるだろうなと思いました。

日本語をめぐる言語の問題は、語尾など、強調する必要のないところだけが強調できるという音声言語それ自体の特徴のことや、自由に誰が作ってもよく、その実感が大勢の人に共有できたら市民権を得ることができるオノマトペのことなど、まだまだお話しすべきことはいっぱいあるのですが、それはさておきます。

すでに前回まで、いろんな絵を見て頂きながら折に触れてお話ししてきましたように、絵巻などマンガ・アニメ的な文化伝統を探っているうちに気づいた大きなことのひとつが、日本では「本質」とか「永遠」を探求するよりも、好奇心によって「現象」を逐一描出し、それを享受するのが好きだという問題です。次の瞬間には変わってしまう表情や動きを生き生きと捉える。画面を小宇宙と考えるのではなく、現実を切り取っただけだから、画面から人物がはみだしても平気。燃えさかる火や流れる水やうねる大波や雨や稲妻など、あらゆる自然現象も線で動きとして描いてしまう。風もはためきやひるがえりで表す。車など動きの速いものは「流線」（動線）とも言う）を付けてそのスピード感を出す。下から見上げたり上から見下ろしたりする描きにくいアングルも、なんとか感じを出して描こうと努力する。こういう難しいものは、リアルな描写力がよほど発達してからしか西洋の画家は手を出しませんでした。日本では病氣も餓鬼も妖怪も地獄の有様も、あらゆる「現象」を何でも絵にしよう。

子どもたちだってすごいです。家の中で遊ぶ、勉強する、表で遊ぶ、喧嘩する、手伝う、大人の行事に参加する、などなど、日本ほど子どもを生き生きと沢山絵に描いた民族はないのではないかと。昔の西洋のように子どもを大人への成長過程の未熟な存在として見たのでは決して見えてこない、見過ごしがちな子どもの存在そのものに、子どもの振るまいそのものに、好奇の目を向け、それを面白がっています。それが愛情深い目かどうかは断定できませんが、少なくともそこに描かれている子どもたちの姿は自由気ままで、生き生きのびのびしているのですから、子どもたちが大人の目を気にしながら萎縮しているなどという社会ではなかったことは確実です。これは、子どもというものの「本質」をどう見るかにかかわってくる重大な問題ですが、そこはとりあえず置いておいて、こんなにも子ど

もたちの日常を多岐にわたって描く、というのは、やはり、それが何のためか、という目的を超えて、あらゆる「現象」を捉えようというあくなき精神の発露だと思っております。

このような「本質より現象」に関心があるという傾向は、特別にマンガ・アニメ的な文化伝統に見られるだけではなく、じつは日本の文化全体に言えるのではないかと私はそれを探ってみたくなりました。すると、私のような浅学非才の身でも、さまざまなことが分かってきて、格好の研究課題になりはじめたのです。以下に、まとまりがないまま順不同でそれについてお話しさせていただきます。

まず、「本質より現象」ということを端的に表しているのが日本語の辞書です。項目がやたら多い。西洋語の辞書を見ると、一つの項目にいっぱい意味が書いてあります。例えば「LIFE」。「LIFE」というのは、中国語のほうが西洋語に近く、「生」は「LIFE」です。「生」というのは、いろんなものを含みます。「生活」も「LIFE」、「命」も「LIFE」、「一生」も「LIFE」です。ところが日本語ではそれぞれが別の項目になっている。「生」のさまざまな「現象」を別々に捉えるんです。つまり、一つ一つの表れが違うのだから言葉も変える。しかし、逆に、それらはただの「現象」にすぎず、「LIFE」という命の営みに関しては同じことなのだから、「本質」から言うと一つの言葉でいいと考えるのが西洋流なのです。だから西洋語は「LIFE」で全部済ませることが出来ます。欧米の詩などを翻訳しようとしたとき、この「LIFE」が出てくると困るんですね。多くの場合、「命」なのか「暮らし」なのか、決めることができない。というより、その両方を含意していることが多い、詩ですから。詩で「生」の本質を語ろうとするんです。するとやむをえず訳語に突然「生」が登場してきたりする。それに対し、日本語は「現象」を列挙するのに向いています。なお、「LIFE」に関して日常では最近、「いのちとくらし」という言い方をよく聞くようになりました。

日本人ですごい哲学者が出てこないのは、抽象的な思考や観念的な思考が発達している民族ではないからだ、などということが以前、言われたりしましたが、面白いことに、日本の着物の文様でも、文物を完全に抽象して無機的にデザイン化することはほとんどありませんでした。どこか、元の自然物や道具や自然現象の気分や実感をとどめているのです。個々のモノの実感を捨てきれない。(むろん、縞や緋など、最初からの抽象模様や、中国伝来の青海波や鱗模様は別ですが。)

日本というのは地政学的に中国から絶妙な距離があったので、モノは来ても、本家から先生が来たり留学したりしないで済んだことは言いました。しかも日本列島には吹き溜まりのようにいろんなモノが漂着してきます。中国本土から直接来るかも知れないし、朝鮮半島を渡ってくるかも知れない、あるいは沿海州からも来るかも知れません。何でも来るから、ああ面白い、これも面白い、あれも面白い、ということになりやすい。好奇心旺盛で、享乐的。そういういろんなものをとりあえずらっておくんです。ものを雑多に、並列的に一旦並べておくことに対して、居心地が悪くないとも言えます。本質的なことを追求しようとする、どっちが上か、どれが正しいか、有意義か、というように考えて価値の序列ピラミッドを作ったり、これが真実だと思ひ込むと、他を排斥したくなりますが、我々日本人はそうしなくても全然平気、雑然と同居させてしまう、というようなことが言え

るかも知れません。そして、そうこうしているうちに、いつの間にか自然に淘汰が行われるのを待ちます。あるいは以前からのものとなんとなく融和したり折衷習合したり。成り行きに任せるのです。生まれて神社に初詣、チャペルで結婚式、お寺で葬式、あきれた節操のなさですが、とがめる人はほとんどいません。

それからもうひとつ。やっぱり大きいのは、特に 3.11 の後に思ったのですが、日本が災害列島であることは宿命的な力を持っていただろうということです。日本人でほんとうに“永遠”を信じている人はゼロに近いのではないのでしょうか。ヨハネ伝福音書には、「神は、その独り子をお与えになったほかに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」と書いてあるのですが、永遠の命をもらってもしょうがないんじゃないか？ という感じがします。永遠に生きて何が面白いのか、固定されて不動のものが延々と続くことには耐えられない。日本人の大多数はそう思うのではないのでしょうか。災害列島だから、何かをきっちり取っておかなければいけないとか、これは永遠に残したいとか思っても、あっという間に無くなって、それは満たされないことが多いのです。今「震災を風化させるな」などと言っていますが、私なんかはあまり風化風化と言わないほうが良いと思うんです。「風化するよ」と思っているわけです。風化は当たり前、そうやって日本人はやってきたと思うわけです。要するに、それでもしぶとく生きてきた。そのしぶとさというのが一種の無常観だと思います。無常観なんていう言葉が出てくると、どうしても仏教と思うかもしれませんが、日本の場合、仏教よりずっと古いと思います。しかもインテリではなく、庶民が無常観を持ったと思うんです。要するに、あっという間にかっさらわれて死んだりして、にもかかわらずまた新しい生命を燃やしてやっていくということです。そうすると、何が出てくるかということ、生命の循環なんかに対して非常に敏感になります。一旦死んでもまた生きてきてくれるとか。生命とはそういうものですね。命もめぐり季節もめぐり。そうすると、「循環」を「永遠」の代わりに考えれば良いわけです。もちろん、日本語にも「常世」とか「常しえ」という永遠概念がないわけじゃない。でもそれは変化しながら続くことです。いわゆる固定されたものが永遠というのではなく、循環するということ。循環するということは、そこには圧倒的なバラエティがうまれます。例えば自然なんかがそうです。それを愛でるという風潮が出てきます。そして、それが無常観と一緒に仏教の中に入った場合に「一切衆生悉有仏性」という考えになります。涅槃経の中にある言葉ですが、それがいつの間にか比叡山なんかに残って、平安時代に言われていたのが「草木国土悉皆成仏」。「草木」には動物も入っているのでしょうか。「国土」は無機質な物も含めています。それが「成仏」するのだと言っています。そんな馬鹿な、と思うかも知れませんが、等しく成仏しうような存在なんだ、みんな命があって人間と同じなんだ、ということです。ここには価値のピラミッドがない。上下がない。

明恵上人という人がいました。明恵は華嚴宗の人で、「華嚴宗祖師絵伝」の絵巻を作らせた人です。法然より後の 13 世紀の初頭、鎌倉仏教が始まった頃の人ですが、鎌倉仏教とはまるで違うことをやっていた人です。明恵は「草木国土悉皆成仏」という言葉は言っていないのですが、しかしやっていることははっきりそういうことです。明恵のいた高山寺に「鳥獸戯画」もありました。「鳥獸戯画」が何を表しているかということ、人間も動物も同じなんじゃないかということです。「鳥獸戯画」は明恵より

先に描かれてはいますが、それを保存していたわけです。また、すばらしい子犬やつがいの鹿の彫刻を置いています。自分の肖像画も、小鳥たちが飛びリスが枝にいる松林の中で、松の木の股で座禅を組んで瞑想している姿なんです。宮沢賢治みたいに石を集めていたり、自分が愛している島に向かって手紙を書いたりしていました。島ですよ、海に浮かんでいる島。そういう面白い人で、まさに「草木国土悉皆成仏」ということを思っていたにちがいないです。

それから神道と言われているものなんかも本来そうです。御神体が木々の生い茂った山だったり木だったり石だったりいろいろするわけですが、鯛の頭も信心から、ということですね。自分たちに影響を与えるもの、怖いもの、ご利益を与えてくれるものはみんな神様なんです。敵でもなんでもそれを敬わないと祟りが来るかも知れないからその祟りを恐れて祭り上げて、それによって逆に自分たちの守護神になってもらうということを繰り返しています。有名なのは菅原道真の天神さんですよ。今流行りのパワースポットも、21世紀になってもまだそういう迷信をやっているわけです。いえ、私はそれを迷信だとは思いません。祈る、というのはすべて自然な心の働きだと思います。日本人は昔と何も変わっていないのです。ですから生きている人間も簡単に神様になってしまいます。戦後70年と言っているその戦争で死んだ人は310万人と言われていますが、とにかくみんな神様になってしまいました。それを宗教体系として考えたり利用したりしたら訳がわからなくなります。明治初年に出来た靖国神社、あれは、敵だった西郷さんとか、会津の人たちを祀っていないから、A級戦犯を合祀する以前から、日本の伝統に反する神社なんです。伝統から言えば、犠牲になった民間人も侵略して殺した他国の人々も米兵も、みんな平等に合祀すべきなんです。

話を「草木国土悉皆成仏」に戻しますが、それは繰り返し現れてきます。「みんな違ってみんないい」の世界が特に発達したのは江戸時代です。万物を愛でる。どんどん繊細な感覚が磨かれる。江戸時代は朝顔市など植木屋もとても流行しました。それを浮世絵にも描いています。図鑑も出版されました。花も鳥も虫も大好きで描きました。ついでながら、ファーブルの博物館に来るのはほとんど日本人だと言われています。フランスに行って花が咲いていて「これ何の花ですか？」と聞いても多くの人は名前を知りません。だいたい関心を持ってないですね。花は花なんですね。白い花。それでいい。もちろん知っている人もいますが、例外的だということでは、日本人のほうがよく知っていると言えます。桜ほど代表的ではない花も結構知ってるでしょう。そういうことが起こるといのは、ずっとそういう精神を持ち続けてきたからです。これも「現象」に対する関心です。部分や細部に対する好奇心です。そうやって何でも愛でるといのは、並列的に命というものを認めるということです。そして、それは災害列島によって育まれた無常観から来ているのではないか、というのが僕の説です。（イギリスにはフランスよりもっと具体的なものにこだわって自然を愛でる人が多いようです。）

そういうさまざまなものを享受する能力というのは、もう一度言い直しますが、そうであらねばやっていけないんです。大事にしていたものがあつという間に壊れたりするわけですから、細かいものを愛しているほうがいいですね。すぐ目移りしたっていい。これがダメならこっちにしましょう、と

ということです。「女房と畳は新しいほうがいい」とかも言いますが、日本人は、とにかく新しもの好きです。それは異常なほど新しもの好きでしょう？ それは日本人の根底に、大事に取っておこうと思っても、潰れ、押し流され、焼けてしまう。それをくよくよ惜しむぐらいなら、そんなもの忘れてば一っと新しいものに行ったほうがいい、という心情があるからではないでしょうか。新しもの好きになるのは享樂的無常觀という側面があるのではないかという気がします。

街なんか木造建築で残すには非常に不利です。それこそ災害列島だから不利なんです。不利なんです、しかし災害がなくても平気で壊しますよね。戦後、堅牢なはずのコンクリート建築になってからもスクラップ&ビルドばかりやっていますよね。昔よりむしろもっと激しく壊しています。うちの近くの農家なんか、遺産相続のためとはいえ、惜しげもなく旧家も立派な屋敷林も壊しちゃう。そうするとそこに暮らしている人は震災と同じことをやってるわけでしょう？ 自らやっているんですよ、みなさん、日本では。突然震災の時だけふるさとふるさとと太鼓を叩いている、という風にしか僕には思えなかった。要するに、平素からどんどん壊しているのに、とつい思ったのです。しかも肝心の震災復興でも、ふるさとふるさとと言っているわりに、その二大要素である、景観と共同体の両方をやたら時間をかけて壊していますよね。被災者がほんとうに気の毒ですよ。

震災の後で、みんな残すとか、記憶がどうか言っていました、日本人的じゃないと私なんかは思いました。いや記憶は残したほうがいいし、残さずにはいられないし、残せる人は残せばいいのです。それを風化させちゃならないとか、他人に言う必要はないです。つらくならないためには出来たら忘れられるものは忘れたって構わないんじゃないかというのが僕の考えです。日本みたいなところでは、そのほうが生き生きとがんばってやっていけるんじゃないかと。いや、そんなに単純じゃないですね。私は、莫大な費用をかけて奇跡の一本松の偽物を作ったことは、僭越ながら、はっきり愚行と言いたいです、気仙沼の第十八共徳丸は残してほしかった。あの震災の記憶遺構として、あれ以上のものはないと思います。残念です。

私は変に保守的なところがあって、新しもの好きというのは嫌いです。西洋などは古い町並みをよく保存していてすごいと思いますし、日本でもそれができないかと思って焦燥感に駆られています。例えばパリに行って、20年くらい経ってもう一度センチメンタルジャーニーのつもりで行ったとしても、ものすごい満足感が得られるんです。なぜなら不動のカテドラルがあって、前に行ったときとほとんど同じような店が並んでいて、同じ店に入ったりすることができるからです。古い写真を見ると、百年以上変わっていないように見えるところだってざらにあります。日本はどうでしょうか。20年も経てば街も店もみんな変わってしまって、何がなんだかさっぱりわからなくなります。それでもみんな平気です。これもやはり享樂的無常觀のなせるわざなんじゃないでしょうか。

ところがです。私は絵巻物を調べ、屏風を見、寺社をまわり、仏像を拝観しているうちに、はたと気がついたのです。こういうすばらしい文化財が本当によく残っていることにです。みんな燃えてしまってもちっともおかしくないし、実際、しばしば火災や震災に見舞われているにもかかわらず、です。それについては、祖先の人に本当に敬意を表したいし、感謝したいと思います。火の粉の下を坊さんたちが懸命に運んだり、担いだりして持ち出してくれた、その恩を決して忘れてはならないと思

います。私は、六年生の国語の教科書に、「鳥獣戯画を読む」という一文を書き、その中でこのことに触れたのですが、子どもたちの感想ではそこに一番感動した、というものが多いのです。嬉しいですね。

(平成 27 年 10 月 30 日三鷹ネットワーク大学にて)

この文章は、平成 27 年 10 月 9 日(金)、16 日(金)、23 日(金)、30 日(金)に三鷹ネットワーク大学で行なわれた、アニメーション文化講座「日本伝統文化に見るマンガ・アニメ的なるもの—その独自の発達と日本語—」の第 4 回目の講義内容を中心にして、講師自らが加筆・再構成したものです。